

# わたしの聖戦

◎◎女性が働くことについて◎◎◎◎

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 不況と資格

不況が長く続き、様々な場面でその影響が取りざたされるようになってきた。不況というより、そもそもこれが普通なのかもかもしれないが、高度成長期やバブルを経験してきた国にとって、経済の厳しさはまたひとしおである。

高校や大学卒業生たちの就職が順調にいかないという話もニュースとして流れている。慢性的な人材不足にあえぐ中小零細企業の、学生たちの視線がよそばかり向いていることへの不満の声も耳にするが、この種のミスマッチも不況という経済状況の一面なのかもしれない。

大学卒業生や、すでに社会人として働いている人々のなかには就職難に対応するために資格取得の道を選ぶ人も増えてきた。経済が低迷しているときは資格を欲する傾向が強くなるというが、まさに今がそのときのようなだ。

特に、これまた絶えず人手不足にある医療や介護の資格を取るための専門学校に人気が集まっている。ある新聞記事によれば、准看護師の養成学校に入学する者の最終学歴が大学であるケースも決して珍しくはないという。むしろ、大卒者や社会人の入学者は、中卒よりはるかに高い比率を占

めており、倍率も年々上がっているらしい。大学卒業者に積極的に専門学校を勧める進路指導もおこなわれていると聞いた。何が何でも大学へ、という考え方にも多少の変化が起きつつあるのかもしれない。

貌させたのは、当の看護師たちの努力や社会情勢の変化などがうまく絡まった結果だろう。准看護師の養成コースは、戦後の看護師不足に対応するために設けられ、中学卒業以上で入学できるのが魅力である。その

看護師は歴史も長く、  
人気も高い。



運営の80%が医師会によるものだということからわかるように、卒業後は主に診療所や開業医のもとで勤務することを狙いとしていた。入試の難易度が高くないこともあり、これはこれで一定の人気を維持してきた。

数ある医療・介護関連の資格のなかで、看護師は歴史も長く、人気も高い。かつてナイチンゲールは、看護師という職はトイレ掃除婦より下の位置づけにある、と述べたが、その低い身分にあった職業を人気ある職に変

時代が変わり、医療が高度化していくにつれ、看護師教育が急速に専門学校から大学教育に移行してきた。それが結果として看護師の質を高めたかどうかは議論のあるところだが、ともかく看護師の専門性や高学歴化が進んできたことは

確かである。

そのような流れのなかで、日本看護協会は准看護師を廃止し資格を一本化することを訴え続けてきた。事実、養成学校自体は減少傾向にあったのだ。それがここに来て、再び人気を集めており、明らかに看護協会の意向とは正反対の流れが出来るつつあるというわけだ。

資格やそれに伴う仕事は、世の中に必要とされてこそあり続ける。その観点でとらえれば、歴史の必然性の中で生まれた准看護師という資格がすぐになくなることはないのだろう。医療や病院のあり方が多様化するなかで、資格自体も柔軟であるほうがもしかしたらよいのかもしれない。いずれにしろ、資格は取得してからが勝負である。それをどう生かすかは、結局その人の人生そのものを形づくっていくことと等しいのだと思う。

イラスト・三浦義雄